福生の民家

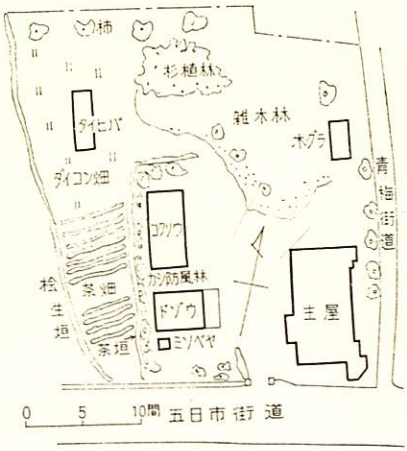
（西多摩文化財総合調査報告集第一分冊より）

福生の民家

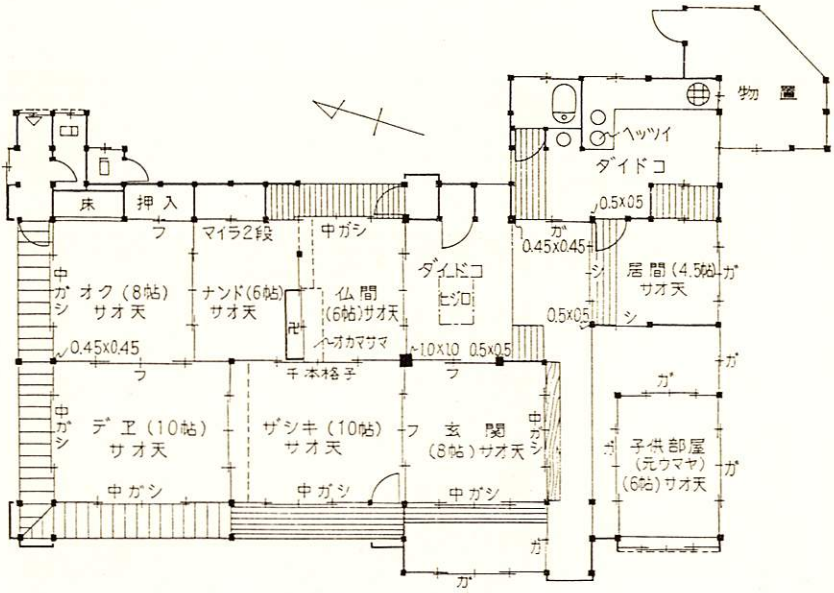
西多摩文化財総合調査報告第一分冊

高橋与十氏宅　福生町牛浜四四

国鉄青梅線牛浜駅南方約三〇〇m、東側は都道（幅約一〇m）に沿う。附近はまだ市街化は目立たず、しかもこの高橋氏宅は大屋敷で、その南側には五～六反歩の菜園などがあって、周囲は比較的閑静である。近年、北側および東側は道路のために削られたらしく、主屋は屋敷の東北隅に偏在する。屋敷は囲い内だけで約八〇〇坪、屋敷内に主屋・土蔵・穀倉（土蔵）・堆肥小屋・木小屋・味噌部屋各一棟を存置する。現在、ほとんど農業から離れた如く（当主は自動車整備会社



高橋与十氏宅屋敷構

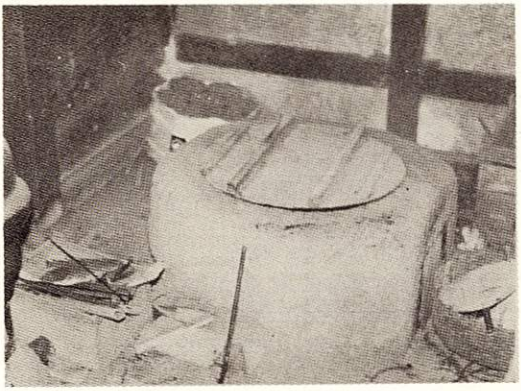


同上氏宅主屋平面図

員）、屋敷内は整頓している。しかし現在も自家の菜園三反歩を人手によって耕作し、三町歩ほどの土地はほとんど貸地としたという。養蚕は約五〇年前までは盛んに行い、畑は主にコムギであった。先代あたりまで米穀・薪炭商など、多くの副業を営んだ。六十歳位の老夫人のお話では、家屋に関する事情はあまり明らかでないが、主屋は五代位前の建築といわれ、土蔵は明治二十四年、穀倉は江戸時代という。

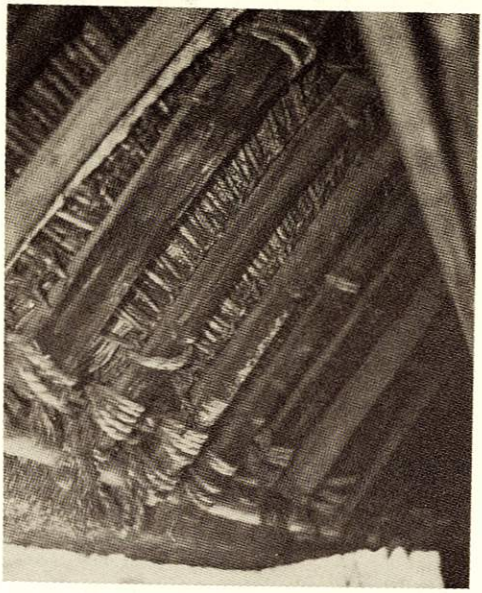
この主屋のハフ（破風）は非常に大きく、狐格子も見事に残っている。葺材はカヤ・ムギの交葺で横縞状の外観となる。平面は大戸前が約三尺張り出され、間口二間の玄関土間に改造され、ダイドコロの一部が八畳の大竿縁天井の玄関の間に改造され、同様に右側も居間・子供部屋などに改められ、ダイドコロと呼ばれる厨房は間口三間、奥行二間で主屋から張り出した形に改造されている。ヒジロも取り払われている。玄関からザシキ（十畳）・デイ（十畳）、曲手にオク（八畳）、裏手にナンド（六畳）・仏間（六畳）と座敷は取るが、デイとオクの間取りが喰い違う。これはオクがもと十畳で、デイと間仕切が一直線上にあったもので、おそらくナンドを広くするためにオク・ナンド間の建具をオクの方へ移動したものと思われる。この部屋の出隅に柱のない型はよく見られるところで、こう考えると、仏間とナンドはもと一室で、田の字型の平面であった如くである。一階天井はすべて竿縁天井が張られているが、オオダナ床は板簀子天井となり、養蚕の跡を残す。なお主屋の縁側天井は

同　主屋

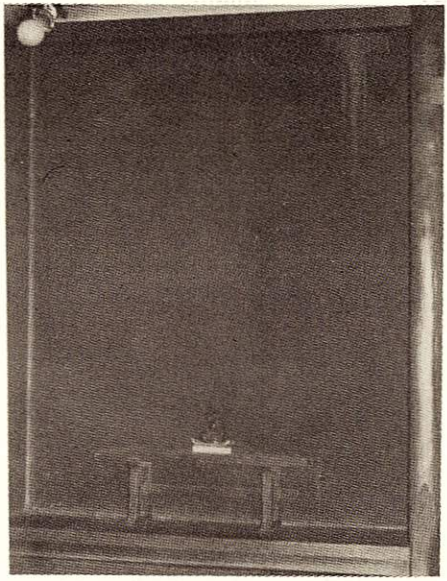


同　ダイドコロ大釜

小屋裏のまま葺き下ろしであって古型を保つ。



高橋与十氏宅主屋縁側軒先

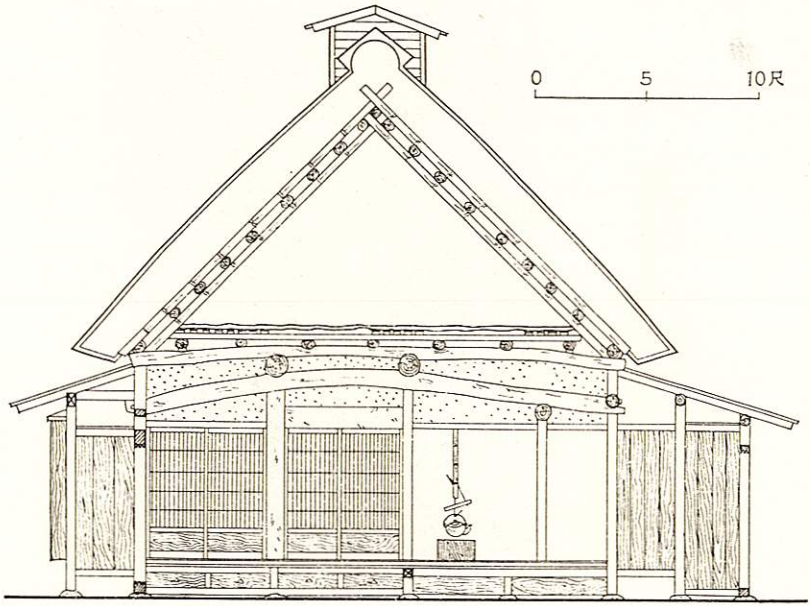


同　奥床の間

石川一郎氏宅　福生町熊川二八六

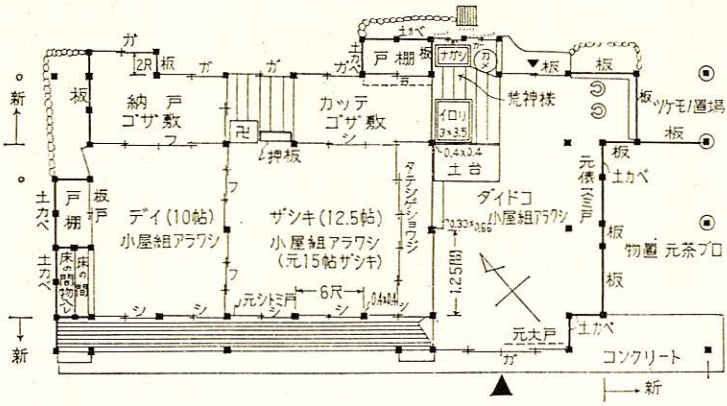
石川健一郎氏宅の約二〇〇m南方にある。附近は農家をもって囲まれる一部落である。当家の当地への定着は古く、北条時代にさかのぼるといわれる。石川一族の本家と称せられる如く、家屋も相当古く、当主の石川老人も建築年代に記憶はなく、おそらく二〇〇～三〇〇年の年月を経過したものではないか。家族は七人で、専ら農業に従事する。耕作地はあまり広くなく、五反歩。養蚕は十七貫を上げ、畑は大小麦・蔬菜など。

主屋は現在セメント瓦葺に改められたが、軸組は旧のままである。すなわちダイドコロの小屋露わしはもちろん、ザシキ（一二・五畳）・デイ（一〇畳）ともに小屋露わしで、いわゆる天井なく、裏側のナンド・カッテは下屋に納まる。南側の縁側はもとはなく、ザシキ等の建具もシトミ戸であったという。ザシキはもと一五畳で、現在の南北の竪繁障子はあとから入れたもので、あるいは台所側との仕切りに建具はなかったと思われる。梁以上の小屋組には束立てはあるが、これはもちろん瓦葺改変の際のもので、ダイドコロ東側外壁の位置は現在、切りつめられている。この家にもザシキの仏壇の隣にオシイタがある。ニワ先に納屋兼仕農場・外便所・風呂場各一棟、鶏舎三棟などがある。平面は多少の改変はあるが、古い型を保ち、いわゆる大黒柱も細く（八・三×六・六寸）、

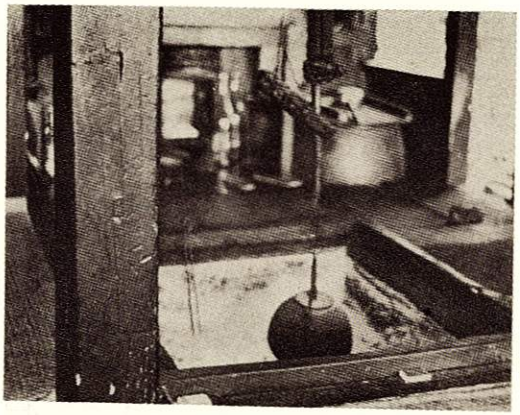


石川一郎氏宅主屋断面図（ダイドコロからザシキ方面）

江戸初期農村建築の参考資料となっても、文化財としては多少の難がある。宗旨は真言宗。



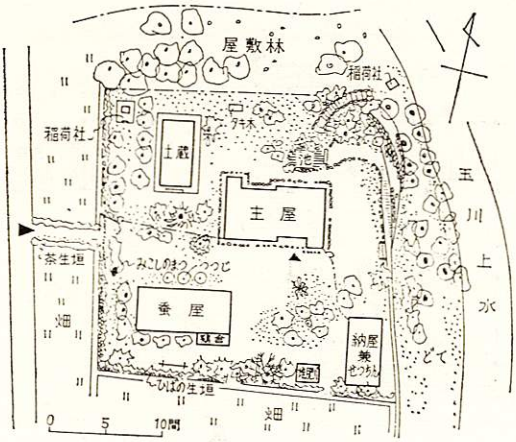
石川一郎氏宅主屋平面図



同　大黒柱とイロリ

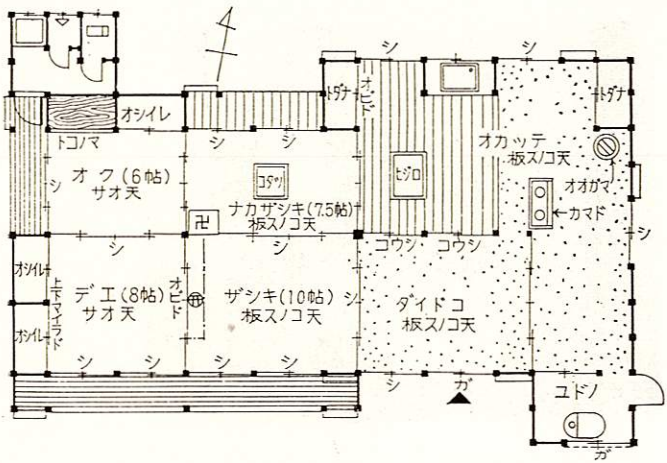
森田新平氏宅　福生町福生五三七

国鉄福生駅南方約六〇〇mの耕地に囲まれたところにあり、駅前の繁華街の影響もなく、見事な屋敷林の中にある旧家の構えである。屋敷は南側間口約二五間、西側同じく約二五間、さらにそのうち屋敷続きに北側にスギ・ケヤキなどの屋敷林があり、北方からはこの辺に見られぬ屋敷相を呈する。さらにまた東側は玉川用水の土上敷（堤）の幅約一〇mの植林があり、その樹木が巨大に育って東側からこの屋敷を覆っている。これらの樹相は主屋北方にある池に映えて巧みまれな美庭をつくる。しかもこの家は農家をほとんど離れた如くで、農具や収穫物の散乱なく、よく清掃され、都人士を案内したいほどの屋敷である。



森田新平氏宅屋敷構

主屋の屋根は入母屋型、葺材はカヤ・ムギ・スギ皮で、縞状に腐朽している。主屋西側に簡単な内庭となり、その北方に土蔵一棟があり、さらに西北隅に稲荷社がある。主屋西南方の蚕室は貸家に改造中であった。その他、東南



同　主屋平面図

隅に納屋・堆肥舎各一棟があり、余猶ある屋敷構えである。ちなみに主屋は安永頃（一七七二～八〇）の建築といわれている。

当宅はいわゆる鍵屋敷となり、床の間はオク（六畳）にあって南面する。床脇の部分が押入となるが、内法の上にランマ障子が見える。押入の上のランマは不用であるから、この押入は後から縁側に張り出して設けたこと明らかで、奥行の深い床の間も、もとからここにあったかどうか疑わしい。デイの押入とともに縁側に張り出して設けたこと明らかで、中ザシキ外の切目縁がデイとザシキにかけて廻らされていたと考えられる。床の間裏の便所は、ダイドコロ東南に突き出たユドノとともに、後々の増設である。カッテにヒジロが残るが、ケヤキ枠の二口カマドと珍らしく大ガマがそれぞれダイドコロにある。

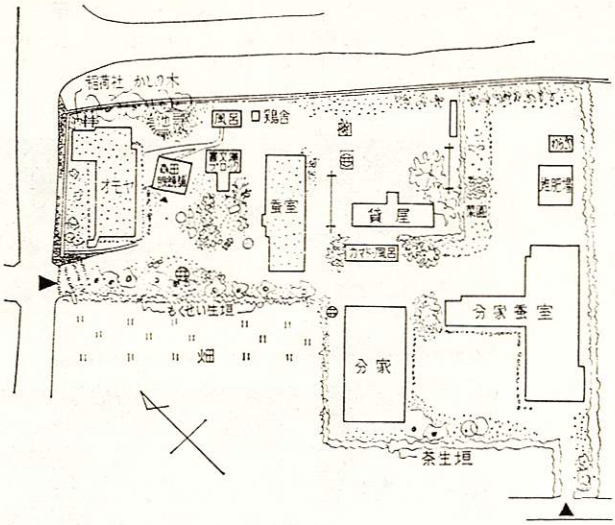
森田新平氏宅主屋

前記、縁側について、当主はもと中ザシキ外のように切目縁であり、大正末年頃、現在のように長手張りにしたという。

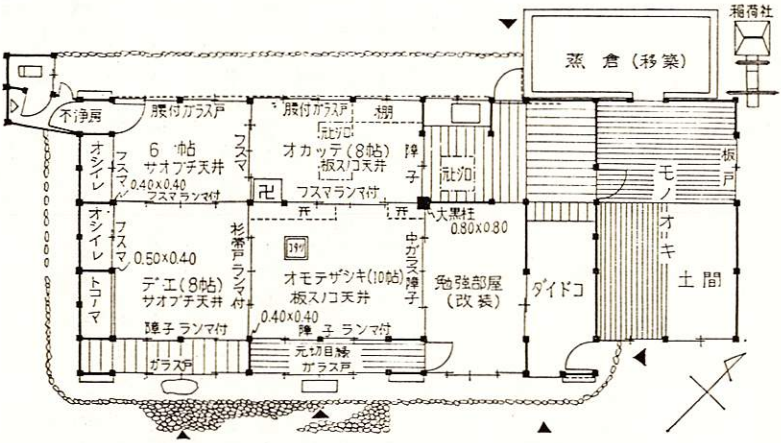
屋敷は玉川用水に隣接し、上水の水面は屋敷地盤より五～六m高い。主屋後方の池も、この上水の滲透水を水源とすること明らかで、昔はこの屋敷あたりを「水窪」と呼んだという。附近の用水の水源ともなっている。現在、貸地約五、〇〇〇坪、山林二反歩、畑二反歩を所有する。用水は現在、井戸と町営水道、馬の飼育は明治初年まで、宗旨は禅宗、当主は一五代目という。

森田英雄氏宅　福生町福生四五五

福生駅の東南方約一㎞、多摩橋方面に至る都道と奥多摩街道との分岐点に狭まれた地点にあって、これらの新設道路の



森田英雄氏宅屋敷構



同　主屋平面図

ために屋敷は後方および側面を多分に分割され、主屋背面は雨戸立てきり、外は格子戸立てきりとなる。主屋の外に蚕室（現在貸家に改造）・コンクリートブロックの文庫倉・風呂場各一棟があり、主屋前に同家経営の眼鏡店がある。当家は森田家の本家で一三代目といわれ、古く京都で祐筆の職にあり、当地に移住後も元禄頃から漢学塾を開き、古書籍・書画・古文書を多く所蔵されるという。このように古くから文人、歌人との往来も多かったようで、現在も庭園に若山牧水の歌碑があり、夫人もその道の方である。

主屋は入母屋型、葺材はカヤ・ムギ・スギ皮の混ぜ葺で、各材の腐朽の遅速によって横縞をあらわし、特異の外観となる。

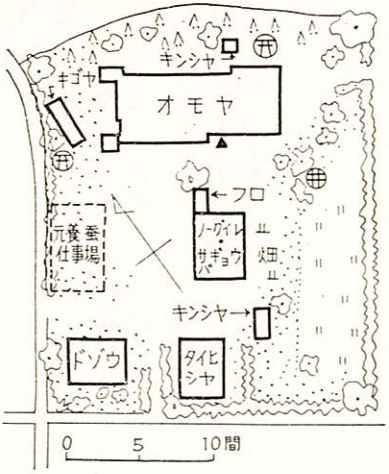
平面は田の字の整形で、改変のあとはあまり見受けられないが、ダイドコロ（土間）の大部分は天井が張られ、物置・勉強部屋などに改装されている。そのダイドコロ北側に蒸倉というもとの製茶室が壁に接して移築され、今は土蔵の用をなしている。オモテザシキ南側の縁側はもとデイ縁側と同様に切目張りであったが、現在は新しい縁甲張りとなる。大黒柱（八寸角）の北側にヒジロ跡があり、各室の天井は板賃子天井（オモテザシキ・カッテ）、竿縁天井（デイ・オク）となり、天井の改装もない。室内はこのように旧態を保つが、家具調度は新しいものが置かれて、農家の感はない。この主屋は一六〇年前（文化頃）の建築といわれ、側柱に長押の使用がない。

内田満蔵氏宅　福生町福生六二〇

前記、森田新平氏宅の西方約五〇〇m、玉川上水の南側にあり、多摩川の河原までも一五〇mほどのところ、附近には寺院などもあって静かな住宅地となっている。当家訪問の際は主屋改造中で、ダイドコロ部分はすでに取りこわされ、他のザシキ（一〇畳）・デイ（八畳）・ヘヤ（六畳）などに物置同様になっていた。平面は前記二氏宅に酷似しているが、多分に改造の部分があり、採録の対象とならなかった。しかしこの屋敷は三八〇年前、玉川上水開設以前からの存在といわれ、屋敷の東を流れる上水路の水面は屋敷の地盤よりはるかに高く（約五m）、水路と屋敷との間には幅六～七mの堤が築かれ、その上の植樹は現在は高々と育って見事な樹林をなしている。玉川上水は多くの村人の奉仕によって施工され、工事に加った農民は各戸水口五寸角の水利権を得たという。

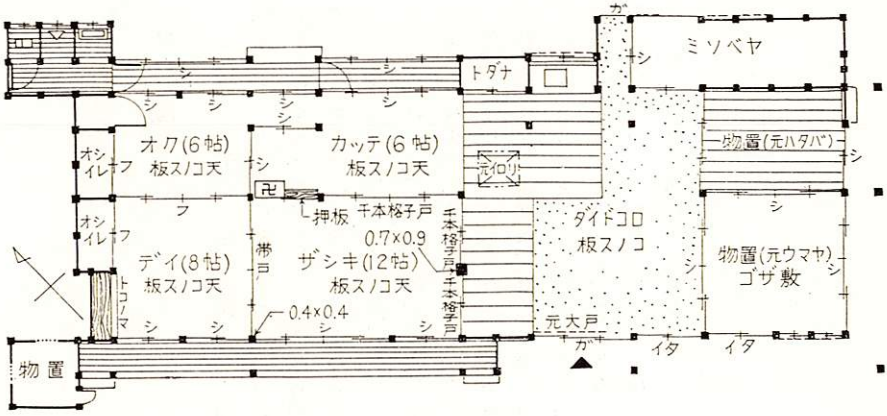
石川健一郎氏宅　福生町熊川二八二

国鉄青梅線拝島駅の南方約一kmの農村地帯にあり、比較的農家が混み合っていて、都市化の様相なく、まだ田舎の感はある。当家はもはや農業はほとんど廃止して貸地貸家に転じたようで、外人向小住宅「ハウス」を附近に数軒所有している。養蚕も約一五年前にやめ、畑作も五反歩位という。屋敷は間口約二二間、奥行約二六間、約六〇〇坪、あまり変更はなく、主屋の外に土蔵・堆肥舎・納屋・木小屋をそれぞれ一棟配置しているが、主屋の西方にもとの蚕室（約一五坪）の跡があり、外に小鶏舎二棟、金毘羅宮と稲荷社を主屋の東西に配置している。現在は井戸（常水面約一三尺）と町営水道を使用するが、もとは、用水路を引き込んだという。



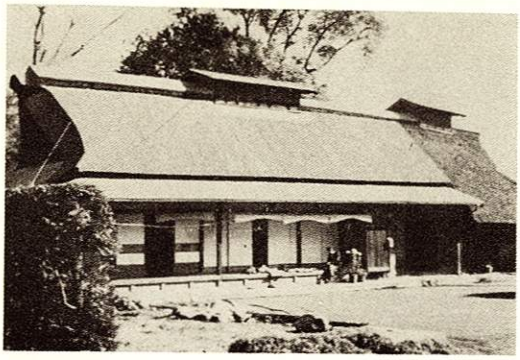
石川健一郎氏宅屋敷構

主屋は例の如く入母屋型でカヤ葺、傷みはなはだしく、その大部分がトタン板被せとなっているが、棟にキヌキ二カ所がある。東側の妻格子は板被せとなり、破風板なども認められない。主屋の架構は梁間三・五間、二重梁となり、小屋内はタナとなる。間取

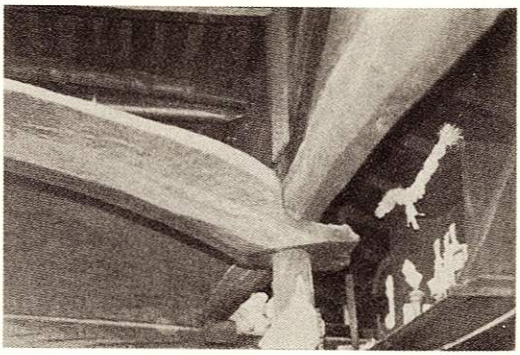


石川健一郎氏宅主屋平面図

りはダイドコロから一二畳のザシキ、八畳のデイ・六畳のオク・ナンド跡・六畳のカッテと田の字型に整った形に配置されるが、物置・便所などは新設である。この家にはザシキ隅にオシイタ（押板）がある。仏壇と南面して並んでいるが、その用途は家人もよくご存じない。ただこのオシイタは仏壇とともに建具の内側に設けられている。この家にはザシキの大黒柱附近に千本格子戸（大坂障子）の使用が多く、使い込まれて美しい色を呈している。ダイドコロ先に元ウマヤ・ハタバ・ミソベヤのあること他例にも見られるとおりで、板張カッテの中央にチョウナはつりの柱、同じ差鴨居なども見られて、相当の古建築と思われる。宗旨は真言宗。



同　主屋



石川健一郎氏宅ダイドコロ梁